

聞き書き神戸映画史 映画館の「危機」の記憶を探る

——塩見正道インタビュー

上田 学

UEDA Manabu

神戸学院大学人文学部

塩見 正道

SHIOMI Masamichi

神戸映画サークル協議会

要旨 本稿は、2022年2月に神戸映画資料館で開催された公開研究会「聞き書き神戸映画史 映画館の「危機」の記憶を探る」における、神戸映画サークル協議会の元委員長・塩見正道への上田学のインタビューを書き起こし、加えて上田が解題を付したものである。インタビューの内容は、神戸映画サークル協議会（前身の全神戸映画サークル協議会を含む）と映画館、観客の歴史的な関係を、神戸の地域性を交えて語られたものであり、オーラル・ヒストリーとして価値が高いと考え、ここに採録した。

キーワード 映画サークル運動、映画館、神戸、新開地、阪神・淡路大震災

1. 公開研究会「聞き書き神戸映画史 映画館の「危機」の記憶を探る」 (神戸映画資料館、2022年2月23日) 第一部記録

○上田：時間になりましたので、公開研究会を始めたいと思います。神戸学院大学の上田学と申します。

本日は、コロナ禍にもかかわらずご来場いただきましてまことにありがとうございます。昨今どうしてもオンラインでのイベントというのが中心になっておりますけれども、密にならない人数で、神戸の映画ファンにいろいろご質問いただきつつ研究会をできればと考えて、今回は対面での企画といたしました。

このような研究会を企画いたしましたのは、もう一昨年のことになりますが、ミニシアターに関連する支援運動なども起こりつつ、また一方で、そこで働く人達の労働問題なども表面化して、昨今は映画館をめぐる問題が大きく取り上げられることが多くなっています。そういう中で、今年7月には岩波ホールが閉館ということもあり、映画館の危機ということが叫ばれております。あらためて、過去にもっと大きな映画館の危機があり、新開地も多くの映画館が閉館し

ていった中で、そうした歴史や阪神・淡路大震災のことも含めてお話を伺えればと思ひまして、このようなイベントを企画いたしました。

ご登壇いただくのは、神戸映画サークル協議会の元委員長の塩見正道様です。

塩見さんの『神戸とシネマの一世紀』¹⁾や、『「木崎理論」とは何か』²⁾というご著書に、私は触発されて、全く別の形で映画サークル運動について調べておりましたが、そのときに神戸映画資料館の安井喜雄館長にご仲介いただきまして、面識を得ることができました。今回いろいろと映画館、あるいは観客と神戸の関係についてお話を伺えればと思ひ、このイベントを企画した次第です。

それでは、前置きが長くなりましたけども、最初に塩見さんのご経歴や、神戸映画サークルそのものについて、お話を伺えればと思ひます。

○塩見：はじめまして。塩見正道と申します。

最初に、神戸映画サークルという非常にマイナーな団体について、今日は何人か会員の方も来ていただいておりますが、ご存じない方もおられると思ひますので、簡単にお話します。

何をしている団体かという、毎月、新開地のアートビレッジセンターをお借りして「市民映画劇場」という名の映画の上映会をしています。入り口で、最新のチラシを渡していただいたと思ひますが、ここにも書いてありますが、来月で第585回、今年の5月に50周年を迎える上映会です。映画サークル自身が誕生したのは、それからさらに20年ほど昔、1950年8月と言われています。ただ、これは当然僕も知らないし、そのときのきっちりした記録は、僕が見てる限りでは残ってないです。1950年8月に新開地の「神戸大映」、名前は「花月劇場」に変わったりするんですけど、そこで黒澤明監督の『羅生門』の上映会をした。それが最初だと、後年の映画サークルの機関誌に載っています³⁾。

それともう一つ、毎月『映画サークル』という機関誌を出しています。3月号が通刊で第832号になります⁴⁾。

この二つの活動を今、毎月やっています。詳しいことは、また後で話題になったときに話したいと思ひます。

映画サークルというのは、観客が勝手に作っている団体ですので、法人格ありませんが、一応事務所を構えて、上映会を50年続けている。この間配給会社に対して1回も支払いを怠ったことはない。これだけが神戸映画サークルの信頼のあかしだと思ひます。今でも電話一本で、配給会社と交渉してプリントを借りるわけですけども、「おまえのとはあかんわ」と言われたことはないの、まあ、信頼と言えばそれだけですかね。

僕自身は、生まれが1951年でちょうど今70歳なんですけど、大学を卒業してから神戸に来て、1977年に映画サークルの会員になり、ほぼ1年ぐらいで委員になって、以後ずっと運営に携わってきましたが、震災の翌年1996年4月からトップにつかざるを得なくなりまして、紹介していただいたように委員長になりました。

ちょうどそのときの会場は、神戸朝日ホールでした。その当時の委員長です。2003年の3月に退任して、それ以後は、自分の好きなことをやらせていただいているというぜいたくな人間なんですけども、今も若手のメンバーが一生懸命やってくれているので、上映会はその後も続いて50周年を迎えるということです。

○上田：ありがとうございます。今、若手のメンバーということでしたが、大体どれぐらいの年代層の方が多いのでしょうか。

○塩見：若手といっても僕から見て若手なので、そんなに若いとは言えませんが、50代という、そういう年代になりますね。

○上田：映画サークルの概要についてお話いただきましたけれども、今から70年ぐらい前、全神戸映画サークル協議会の発足当時、独立プロダクションの製作支援という形で映画サークル自体はかなり活発に活動していて、会員数も相当多かったということを塩見さんご著書で言及されております。そういう中で、会員の参加動機の中核を占めていたのは、映画館のチケットの割引制度で、それによって会員数が多かったということでした。ただし、それが1950年代の半ばから映画産業がだんだん斜陽になってきたときにどうなったのか、この点は塩見さんに伺ったほうがよいですね。要するに割引制度を停止するということがあって、そういう中でも神戸は比較的うまくいったという映画館と映画サークルの関係について、お話を伺えればと思います。

○塩見：今お尋ねになったのは、1957年、昭和32年に、いわゆる「環衛法」、[環境衛生関係営業の運営の適正化に関する法律]⁵⁾という法律ができて、9月2日に施行されるんですが、これは、飲食店とかクリーニング店とか理髪店とか、それから映画興行とか、こうした業者を同業組合に組織して、衛生水準の向上や、料金の適正化を図ることによって、利用者の利益の擁護に資するという目的を掲げた法律なんですけれども、この法律に基づいて、都道府県単位で映画興行組合が作られるんです。そして1957年12月に、東京都映画興行組合が、当時14万ほどの会員を擁していた東京映画愛好会連合という、東京都の映画サークルの連合体なんですが、そこが行っている会員証割引を停止すると通知してくるんです。そして、翌年の1958年1月から東京での割引が一斉にストップするということがあって、会員が激減する。こういうことが起こって、映画サークルは大混乱に陥るといったことがあったんです。この動きが徐々に地方に波及していきます。神戸の興行組合が同じことを行うのは、1年ちょっとのラグがあるんです。今だったら、全国一斉にやるとかそういう話になるとは思いますけど。神戸の場合は1959年の9月15日に、興行組合から、会員証割引をやめるという通知が行われます。その当時、神戸の映画観客組織というのは映画サークルだけじゃなくて、労働組合の中に、組合員の福利厚生のための部門があって、その会員になったら映画館も割引できますよという会員サービスをやってました。これが、神戸地方労働組合福祉対策協議会、略称「地労福」といって、ここが11万人ほどの会員を持ってました。神戸映社は、2万人弱です。団体としては、大きくこの二つ。そのほか会社の中に福利厚生として映画観客の団体を作っているところがありました。興行組合は、この神戸地労福と神戸映画サークルに、割引を停止しますという通告をするんです。それに対して映画サークルの当時のメンバーが取った対応というのは、映画館の館主に、そのまえに今は神戸だったらOS系とか、松竹系とか、日活系というように系列がはっきり決まっていますけど、その当時の映画館というのは、独立座館といって、個人といったらなんですけど、資産家が映画館をもって興行しているという、そういう映画館がかなりあるわけです。それが中央の大手製作会社の系列に組み入れられていくのが、1950年代後半、ずっと進行しています。そういう独立座館主に、「興行協会から割引停止の話があるけど、どう考えてるんですか」というアンケートを取りに行くんです。そうすると、映画館によっては、「まだ全然聞いてない」とか、そういう回答があった。座館主にしてみたら、自分のお客さんをどうやって獲得するかということが一番の関心事ですから、映画サークルの会員が今までいっぱい見に来てくれるのに、割引がなくなって減ったら、これは大変だということなので、映画サークルと、座館主とが協力して観客動員をどうやって維持するかということを考えていくんです。その中で編み出されたのが、映画館に行かれたら分かる

と思いますけど、ぺらぺらの入場券⁶⁾ってありますよね。前売券じゃなくて。200枚綴りとか100枚綴りになってるんですけど、あれを、新開地だったら松本タバコ店という、まあ何ですか、場外馬券売り場みたいなものですね、そういうところに置いておいて、そして映画サークルの会員証を見せた人に割引料金でそれを売るというやり方を合意の上でやるんです。だから、映画サークルの会員は、映画館の窓口で割引は受けられなくなるけども、その代わり、近くのたばこ屋さんに行って会員証を見せれば、映画館の入場券を割引料金で買える、そういうシステムを導入するんです。そうして、ほぼ全ての映画館の入場券を扱うことによって、その場をしのいでいきます。それが、さらに映画館の系列化が進む中で、締めつけも強まって、1962年には、たばこ屋さんに入場券を置くことができなくなります。それまで約3年ぐらいいは、入場券をたばこ屋さんで扱うことによって安く見ることができると、そういう事情があったと思います。

○上田：ありがとうございます。今のお話で、東京は急速に減って、地方へ波及が少し遅くなったというお話もあったんですが、とはいえ、例えば福岡などは、数万人規模で一気に減るということがありました。それに対して神戸は、映画館と映画サークルの関係が比較的良好で、何年かタイムラグがあって、最終的には、それでも話し合いによって解決していったというか、映画館と観客が対話しつつ何とか映画文化を維持していこうという動きが顕著だったように思います。そこが神戸の一つの特徴であったと。同時に、もう一つが、批評活動であったと思います。今回配布された塩見さんの資料で『泉』という雑誌から引用があったりとか、塩見さんの著作の表紙になっている『レフレクター』という雑誌であるとか、裏表紙の『大衆批評-α』という雑誌であるとか、こうした雑誌を神戸の映画サークルはかなり積極的に発行していて、現在も批評に関する雑誌が継続している。こういう例は、東京も含めてほかの映画サークルには見られないような面といえます。もちろん他の映画サークルでも一時期発行されてたということもありますし、1種類だけ発行されてたということはあるんですけど、これだけ発行されてるとするのは、やはり神戸の特徴ではないかと思うんですけど、その点についてどうお考えでしょうか。

○塩見：最初に、今は上映会を毎月やっていますという話をしたんですけども、それ以前の映画サークルというのはどんなことをしていたかという、はっきり言ってプレイガイドなんです。安売りチケットを扱いますよという、こういう活動が、映画の観客組織の存在意味だったんですよ。だから、50年代の半ばに、映画サークルに対して、「ウドの大木だ」⁷⁾という批判が出されるんですけども、別にそのとおりなので、何が悪いという話なんですけど、当時の何というか、左翼的な風潮からすると、プレイガイドでしかないということは、非常に肩身が狭い話になるわけです。当時のメンバーが何を考えていたかという、一つには、割引が停止されるなかで、どうやって会員数を維持するかということですけども、もう一つは、映画の観客組織というのは本当はどういうことをやらなければならないだろうということを考え始めるわけです。その中で、個人名で言うと木崎敬一郎という、その当時26歳ぐらいですけど、彼が、映画を見て、語り合っ、映画の作り手とか批評家とかそういうエリートとは違う大衆として、自分たちはこの映画をどんなふうと思う、感じるんだということを組織していこうということを考えるんです。一人がどう思っているということじゃなくて、一人一人のつぶやきみたいなものを組織する中で、自分たちはこの映画をこんなふうを受け止めるんだということを組織していこうと。それが映画の観客組織の一つの役割だろうと考えて提唱していくわけです。そういう作業をどこでやるかということですが、2万人もいると、個々の会員というのは、安売りチケットがもらえるからということで会員になっている。その当時の会費は月20円です。20円払えば会員になれる

ので、会員になってチケットをたばこ屋で買って映画を見て、そういう会員の顔は、ほとんど見えないんです。そんななかで、木崎ともう一人、中心的な名前で言うと、当時の神戸新聞労働組合書記局にいた^{ありいはじめ}有井基さん。この二人が中心となって機関誌の中で、一人一人の声、つぶやきみたいなものを拾い出して、その声に対して、例えば、それは大手のメディアが流す映画の見方に毒されてるんじゃないとか、そういう議論をふっかけていくんです。それが、神戸の機関誌『泉』の特徴だったわけです。全国にいろんな機関誌があるんですけど、こういうことをやったのは、神戸の『泉』しかないです。

機関誌や批評誌をいろいろ出してるという点ですが、今言ったように2万人もいると、『泉』だけでカバーできないんですね。だから、サークルの代表者向けに、もう少し組織的なことを連絡するための『サークル』とか、それから、『泉』というのは、何十ページ建てという分厚いものですので、原稿が遅れたり、結構、ぎりぎりに出てるんです。「番組表」というのは絶対早く出さないとだめですよ。だから、「番組表」だけとにかく出したりとか、場当たりのことをやっているの、いろんなものを出してるというふうに見える部分があると思います。余り格好よく出してるわけじゃないと思います。ただ、『泉』の編集については、それはものすごいこだわりがあったので、そのこだわりの核心というのは、今言ったようなところにあると思います。

○上田：今のお話について、私の知ってる限りで補足すると、要するに当時の全国的な映画サークル協議会の動きとしては、どちらかというと日本共産党との政治的な関係において活動するというのが中心だったんですけど、神戸映画サークル協議会は、そこから少し距離を置いて、批評活動を中心に観客の側から何とか映画文化を振興していけないかという動きがあったところが特徴で、だからこそさまざまな観客層に向けて批評誌を出していたということかと思いました。

その後、「市民映画劇場」が始まるわけですが、こちらが始まった当初というのは、やはり興行界となかなか折り合いがうまくつかないということがあったように思いますし、あるいはその後の阪神・淡路大震災を経て、また映画館が被害を受けたときに、逆に「市民映画劇場」のほうが注目を集めるというか、場所を特定せずに開催できる。そうした「市民映画劇場」について、現在も続いてますけど、始まったときの苦労やその後の継続ということも、お話を伺えればと思います。

○塩見：そうですね、映画の上映会、「市民映画劇場」は1972年5月にスタートさせるんですけども、そのときのことについて、興行界とのことも含めてお話ししたいと思います。

1972年5月に「市民映画劇場」を、今はもう建物自体がなくなってますけれども、相生町のハローワークの北側にあった海員会館のホールで始めました。

これは、興行の方からすると映画興行に参入したということになるので、余り穏やかじゃないんです。それまではチケット売りが主ですから、まあ協力してるということですよ。それに対して上映会は一応興行ですから、僕らは「興行じゃない」と言ったんですけど、じっさいは興行ですから。最初の頃、配給会社に対して映画サークルにはプリントを貸さないようにとかいろんなことが業界内で言われてたと聞いています。そういうこともあって、当然封切り、その当時の映画館は封切館があって二番館があって三番館があると、今とは全く違う格付けがされてるわけですが、封切り映画を神戸映画サークルが上映するということは、これはまあ、御法度ですよ。さすがにこれはできません。ですから、古い作品でもうお蔵入りになってるようなものとか、そういうものを探してきて上映するという、ちょっと考えられないくらい大胆なことを

してるんですよ。それは、木崎敬一郎と小坂和男の二人が中心になって、この二人は両方も亡くなっていますので、直接聞くことができないんですけども、上映会を始めた。そのときに言っていることは、今の日本映画界は、ほとんどがやくざ映画、それからピンク映画とかポルノ系の映画ばかり作るようになって、まっとうな映画は上映されない、作られないということを批判しています。「市民映画劇場」をスタートさせるにあたっての「アピール」の全文は、『神戸とシネマの一世紀』に収録しましたので、よければ本を読んでください。結局、何でピンクになったりとかポルノになったりやくざになったりするかとすると、製作・興行の側は、「観客が望んでいるから」ということですよ。恐らくそうだと思います。僕も、やくざ映画を見てましたからね。ただ、映画サークルの主張は、観客は、それだけじゃなくて、もっと違う映画を見たいと思っているのを見る場がないのだという、こういう理想を掲げたんです。そして、自分たちは、自分たちがいいと思う映画を上映して、立派に採算を合わすよと。そうすることによって、興行が見捨てている映画に対する、鑑賞要求という言い方するんですけど、観客はそういう映画を求めているということを証明するという、そういう理想を掲げた。これが「市民映画劇場」のスタートなんです。僕は、そういう強い思いがあって初めて何事も起こるので、これはすごいことだなと思いますけど、なかなか大変なことであったことは間違いない。興行の側も、古い映画をやるんだったらしょうがないかなという感じで。もう一つお目こぼしいたいたのは、三宮ではないから⁸⁾まあいいよということもあったと思います。ただ、本当に大変でした。これが潰れなかったのは、やはり日本の映画興行の変化があります。ちょうど1970年代半ばに岩波ホールがエキブ・ド・シネマを始めますよね、1974年2月に、サタジット・レイの『大樹のうた』を上映します。最初は入りが悪いんですけど、高野悦子さんがロングランした。1か月ぐらいロングランして、最後は満席になった。これ以後、局面が変わって、1980年代になると、ミニシアターという系統が出てきますよね。神戸でいうとアサヒシネマという、今はないですが、中央区役所の山側、今はホテルがある場所にあった映画館。そこはピンク映画をやってたんですけど、ミニシアターブームの中で、アート系の作品を上映する映画館に変わっていきます。そんなふうには映画館自身が、アート系の作品にシフトしていくんですけど、今まで完全に統制されていた配給が、ちょっと緩んできます。

そういう中で、「市民映画劇場」で神戸初公開ということが実現できるようになります。このことが、潰れずに続いた一つの原因かな。震災以後、神戸朝日ホールに会場を移すんですけど、ここは一等地ですから、本来なら許されざることですよ。これが許されたのは、岩波ホールの高野さんたちと僕たちとの間でつながりがあり、それから、後でもう一人の登壇者の伊良子^{いらいこ}序さんが詳しくお話になると思いますけど、市民で作る映画祭⁹⁾をやっていく中で、今、名前を出したアサヒシネマさんとか、映画の興行の方とお付き合いができるようになって、「市民映画劇場」が、単に反発だけじゃなくて支えられるという、そういう関係も生まれてきたのかなと思っています。

○上田：ここでも、やはり観客と映画館との対話ということが一つの重要なキーワードになってくるのかなと思います。

そろそろ時間の終わりが迫ってきましたので、会場から質問を受け付けたいと思います。ご質問ある方は、最初にお名前を述べていただいてご質問いただければと思います。それでは赤井敏夫先生、お願いいたします。

○赤井：神戸学院大学人文学部の赤井と申します。今日はすばらしいお話をありがとうございました。

した。お伺いしたいのは、今日のお話にも出てきた木崎さんという人物のことについてなんですけれども、著書を読ませていただいたところ、木崎さんの経歴の中で、1959年に神戸映画サークルの専従事務員になられたというのが載っているわけなんですけれども、これは、木崎さんの生活費を神戸映サが出していたと解釈してよいのかという点です。この当時、つまり1960年代に入りかけの神戸映サでは、いわば雇用しているような専従の従業員の方がほかにもたくさんいらっしゃったのかというのが一点です。

それから二点目は、木崎さんは、『シネ・フロント』のほうに行かれますよね。私は余り『シネ・フロント』を読んだことがないんですけども、ちょっとサーチしますと、どの辺まで木崎さんは関わっておられたのかなという、最後に目次でお名前が見られるのは1999年8月号で、通算274号までお名前が確認できるんですけども、この『シネ・フロント』というのは商業誌だったのか、あるいは何かの団体の一種の機関誌扱いであって、木崎さんはそこでその団体から雇用されて編集長扱いで働いておられたのかということも、もしご存じでしたらご教授いただけないでしょうか。

○塩見：まず第一点目です。専従ということですから、給料は払われてます。ちょっと今日、資料を持ってきてないので正確な金額までわかりませんが¹⁰⁾、その当時、四人の事務局を雇ってます。金額も記録に残ってまして、ちゃんとした給料を出してます。僕がおもしろいなと思ったのは、給与規程を作って、いわゆる公務員の号俸制ってありますよね。それを作って、何年勤務だからいくらというふうに給料を出してます。1959年5月の総会で、事務局長の村上二郎さんという方がおやめになるんですけど、退職金を幾ら出すかという話を幹事会でしてまして、それについても、全て記録が残ってます。村上さんが事務局長のときは船曳良一さんが事務局次長で、この方も専従です。あと女性の事務局員が二人おられて、その四人で事務局。そして、村上さんがおやめになった後、木崎と、それから増本^{ますもとたけし}烈さんという方を雇います。女性二人はそのままなので、五名の事務局員をお給料を払って雇ってるということになります。ですから、それだけのスタッフがいまから、当時の議事録から何から全て残ってるんですよ。僕がこの本を書くことができたのは、一つには、木崎の日記とか手帳を全部読んでいるんですが、もう一つは、当時の映画サークルの記録が残っていて、何年何月何日に誰々が何を言ってどうしたということが、かなり克明に分かったということがあります。

それからもう一つご質問にありました『シネ・フロント』ですけど、これ、もしよろしければ、この『「木崎理論」とは何か』の「第二章 二度目の挑戦」のなかで「シネ・フロント」がいかにして創刊されたかということを書いていますので、確認していただけたらと思います。この『シネ・フロント』というのは、最初は映画サークルの全国組織、映画鑑賞団体全国連絡会議、略称「全国映連」の月刊機関誌として1976年8月に創刊されるんですけど、何年かな。

○赤井：1980年に休刊になっている。

○塩見：ああ、そうですね。1980年8月に休刊します。その前年、木崎が全国映連の事務局長を辞任します。全国映連の考えと木崎の考えが微妙に一致なくて、事務局長を辞めるという中で、本来ならば『シネ・フロント』も廃刊ということになる可能性があったんですけども、木崎自身の強い思いから単独でも続けるといって、翌1981年1月に再刊するんです。それで、その再刊したとき、編集部とか誰もいないんです。誰がやっていたかということ、実は僕もやりました。神戸で編集して神戸で印刷しました。その時、神戸の編集の中心が小坂和男という、さっきもちょっと言いましたけど、「市民映画劇場」を始めたときのメンバーです。小坂さんは長

田にお住まいだったんですが、彼が東京の木崎と連絡を取りながら編集をして、僕も校正とかいろいろなことを手伝って、神戸の星巧社という印刷所で印刷してたんです。それが1年半ほど続いたと思います。その後、また東京で印刷所を確保して編集作業も全部向こうでやるようになります。2001年の春に木崎が脳卒中で倒れたために、東京で木崎の助手をされていた浜田佳代子さんという女性が引き継がれて、最近まで出てました。実は木崎が亡くなる少し前に、『シネ・フロント』の最新号を別の人から見せられたとき、木崎は全く理解できなくて、すごい衝撃を受けたと奥さんから聞きました。というのは、浜田さんが続けてるというのは、全く知らなかったんです。何で知らなかったかという、浜田さん自身が、急に木崎が倒れたことが受け止められなくて、木崎との連絡を一切拒絶したんです。そして、自分で何とか『シネ・フロント』の発行を続けていくんですけど、木崎に対してはそのことを全く知らせてなかったんです。なかなか微妙な人間関係があると思います。いずれにしても、2001年の6月号以後の『シネ・フロント』は、浜田さんの編集になるということです。

○赤井：ありがとうございました。

○上田：最後に塩見さん、配布資料を今回使われませんでしたが一言ご説明いただけますでしょうか。

○塩見：神戸映サの機関誌は昔から最後に映画館の「番組表」をつけてるんですが、これを見てもらうことによって、神戸の映画館がどんなふうに変化してきたのかということが分かるかなと思って、コピーを用意したんです。1枚目が1960年5月号の「番組表」です。封切館と再映館、両方合わせて70館ぐらいあると思いますが、これが当時の神戸の映画館です。この中に、「金券料金」、「一般料金」と書いてあって、三宮の「ピック映劇」で見ようとしたら近藤タバコ店で65円のところが55円で見られるんだとか、そういうふうに分かると思います。これをコピーしたのは、僕は『大人は判ってくれない』を神戸では、いつどこが封切りしたかと記憶してほしいと思ったからなんですけれども。朝日会館で5月10日から『大人は判ってくれない』を封切ってますね。この当時2本立てですね。それから2枚目は、「市民映画劇場」が始まる直前の映画館の状況。こういう映画館があったんだと知っていただけたらと思います。あとは、震災前と震災後のコピーです。震災後比較的早くに再開したのは、ハーバーランドの映画館と、西神戸の板宿東宝です。それから、アサヒシネマさんは2月下旬に再開されてます。そういうことが分かります。

○上田：まだまだ塩見さん、お話し足りないところがあると思いますけども、本日はどうもありがとうございました。

○塩見：ありがとうございました。

2. 解題

今回採録した、神戸映画サークル協議会元委員長の塩見正道氏へのインタビューは、2022年2月23日に神戸映画資料館で開催された公開研究会「聞き書き神戸映画史 映画館の「危機」の記憶を探る」の第一部を書き起こしたものである。この公開研究会は、神戸市の若手研究者助成「令和2年度大学発アーバンイノベーション神戸」の採択課題「神戸の映画館文化の振興に向けた参加型デジタル・アーカイブ構築」（翌年度まで継続）の一環として開催された。著者による塩見氏へのインタビューは公開研究会の第一部にあたり、第二部は田中晋平氏（神戸映画資

料館客員研究員)と田中真治氏(神戸新聞記者)による伊良子序氏(フリー・ジャーナリスト)へのインタビューが実施された。伊良子氏は因幡新平の名で、1997年に開催された「神戸100年映画祭」のプロデューサーを務めており、そのインタビューの内容も塩見氏と同様、神戸の映画館と観客の関係の一端を明らかにした貴重なものであった。ただし伊良子氏のインタビュー内容は、基本的に阪神・淡路大震災後から現在までを対象としていたことから、今回は紙幅の関係上、より遡った時代の証言が含まれる塩見氏のインタビューを採録した次第である。またインタビューの脚注は塩見氏ご自身によるものである。最後に解題として、映画史研究における塩見氏へのインタビューの意義を簡潔に述べておきたい。

占領期の政治的状況を背景に、東宝争議を契機として、六全協以前の日本共産党や労働組合との関係性から出現し、活性化した映画サークル運動は、これまで主に歴史学と映画史の先行研究で論じられてきた¹¹⁾。ただし、映画サークル運動において各地で設立された映画サークル協議会は、設立された地域それぞれの独自性を有しており、決して画一的に論じることはできない。それは、映画というメディアが少なくとも一時期まで映画館という空間と密接に結びついており、そこに生じたコミュニティの地域性という問題と不可分であったからだと考えられる。

塩見氏には、『神戸とシネマの一世紀』、『「木崎理論」とは何か—映画鑑賞運動の理論と木崎敬一郎』に加え、『「戦艦ポチョムキン」自主上映運動再考—「田中ファイル」の発見から』(風来舎、2022年)という著書がある。いずれも神戸や関西の映画サークル協議会の地域性を歴史的に叙述した優れた研究といえるが、特に『「木崎理論」とは何か』は、全神戸映画サークル協議会の事務局員であった木崎敬一郎が、映画批評を映画サークル運動の軸に据えようと奮闘した経緯を明らかにしており、神戸から生まれた新たな映画言説の発信過程を描くことで、映画サークル協議会の地域性の問題を的確に捉えている。

今回のインタビューは、興行界と映画サークル協議会の関係等について、塩見氏の著書に記述されていない具体的な内容が含まれており、その点で開拓途上にある日本の映画観客研究に大きく資するものである。また映画サークル運動が、1960年前後に「プレイガイド」から自主上映へと変化する過程、すなわち藤木秀朗が指摘するように1950年代の「大衆」から、1960・70年代の「市民」に、自主上映の主体が移行していく過程¹²⁾を、神戸の事例は端的に示していることが表れている。著者は以前、新開地の映画館街と全神戸映画サークル協議会の関係性を論じたことがあるが¹³⁾、これらの点からも、戦後の映画観客を考えるうえで、神戸における映画サークル協議会の地域性は重要な研究対象であるといえるだろう。(文責・上田学)

謝辞

本稿の執筆にあたり、若手研究者研究活動経費助成制度「令和2年度大学発アーバンイノベーション神戸」(神戸市)の助成を得た。

註

- 1) 神戸100年映画祭実行委員会・神戸映画サークル協議会編『神戸とシネマの一世紀』神戸新聞総合出版センター、1998年。
- 2) 塩見正道『「木崎理論」とは何かー映画鑑賞運動の理論と木崎敬一郎』風来舎、2018年。
- 3) 村上二郎「六年間をふり返って 映サ協の出来た頃」『神戸映画の友』第52号、全神戸映画サークル協議会、1956年10月。
- 4) 通巻第1号は1952年11月に発行された『映画鑑賞のシオリ』。神戸映サの機関誌は、その後『神戸映画の友』、『神戸映画旬報』、『泉』、そして現在の『映画サークル』へと名称を変えながら毎月発行されている。『映画鑑賞のシオリ』の前に『映画時報』という機関紙があったが、これが通巻第1号ではない。神戸映サは1955年10月に5年ぶりに開いた第2回総会で、発足当時の「独立プロ作品一辺倒」路線と決別する。「その当時の運動を代表していた機関紙が威勢のいい『映画時報』だ。今日の『泉』にうけつがれる『映画鑑賞のシオリ』はそういう運動の大勢のなかでいかにも申訳なさそうに出発した」（『泉』第100号、1960年4月）との記述が、その事情を伝えている。『映画時報』は第21号（1953年11月）まで発行されたとされるが、第11号、第14号が残っているだけで、神戸映サ発足を伝えたであろう1950年9月発行の創刊号も現存しない。
- 5) 「環境衛生関係営業の運営の適正化に関する法律」昭和32年法律第164号、1957年6月3日。
- 6) 映画興行組合発行の「入場券」は、使用しないマルチプレックスの映画館が増え、神戸でも元町映画館など一部の映画館が使用しているだけになっている。
- 7) 映画評論家の瓜生忠夫は、「映画サークルはつねに享受だけを問題にするもので、『うたごえ』や文学サークルのように創造のよろこびをもたないものだから、それは組織が大きくなればなるほど、会員一人々々の積極性は消えうせて、ウドの大木になりやすく、まかり間違ると少数者の独裁におちいり」、「いくらかでも創造的な喜びを味わう方に転化」することを求めた。「サーヴィス機関と考える人が大部分を占めるところは一刻も早くつぶれる」と「いささか過激なことば」が用いられたため、映画サークルの活動家のあいだで物議を醸した（瓜生忠夫「ウドの大木たるなかれー映画サークルは映画が安くみられるだけでよいかー」『学習の友』第36号、労働者教育協会、1956年10月）。
- 8) 戦後の神戸の映画興行の中心は三宮エリアである。海員会館はJR神戸駅の東約150mに位置し、三宮と新開地のほぼ中間にあった。
- 9) 神戸の企業4社の協賛を受けて市民の手で企画・運営された「KOBE国際映画フェスティバル」（第4回からは「KOBE国際映画祭」）。第1回は1988年4月に「アジア映画の中の女性たち」をテーマに開催され、1997年の第10回まで続いた（『神戸とシネマの一世紀』前掲、149～162頁）。
- 10) 木崎の初任給は基本給12,900円、職務手当4,500円の計17,400円。給与は基本給のほか、残業手当、職務手当、家族手当があり、上半期10%、下半期15%の臨時給与を支給していた（「会計報告書」『1959年度第4回幹事会議案書』電々会館、1960年2月24日）。
- 11) 近年の研究として、成田龍一「『サークル運動』の時代ー一九五〇年代・『日本』の文化の場所ー」河西英通・浪川健治・M.ウィリアム・スティール編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ 多文化の歴史学と地域史』岩田書院、2005年、佐藤洋「映画を語り合う自由を求めてー映画観客運動史のために」黒沢清・四方田犬彦・吉見俊哉・李鳳宇編『日本映画は生きている3 観る人、作る人、掛ける人』岩波書店、2010年など。このほか歴史学者と映画研究者が共同で、全大阪映画サークル協議会の山本明氏の旧蔵資料を調査した研究成果として、著者が共編者を務めた『人文学報』第116号「山本明コレクション」特集号（京都大学人文科学研究所、2021年）が発行された。
- 12) 藤木秀朗『映画観客とは何かーメディアと社会主体の近現代史』名古屋大学出版会、2019年、第6・8章。
- 13) 上田学「山本明コレクションにみる全神戸映画サークル協議会の地域性」『人文学報』第116号、京都大学人文科学研究所、2021年。

主要参考文献

- 上田学「山本明コレクションにみる全神戸映画サークル協議会の地域性」『人文学報』第116号、京都大学人文科学研究所、2021年
- 神戸100年映画祭実行委員会・神戸映画サークル協議会編『神戸とシネマの一世紀』神戸新聞総合出版センター、1998年
- 佐藤洋「映画を語り合う自由を求めて——映画観客運動史のために」黒沢清・四方田犬彦・吉見俊哉・李鳳宇編『日本映画は生きている3 観る人、作る人、掛ける人』岩波書店、2010年
- 塩見正道『「木崎理論」とは何か—映画鑑賞運動の理論と木崎敬一郎』風来舎、2018年
- 『「戦艦ポチョムキン」自主上映運動再考—「田中ファイル」の発見から』風来舎、2022年
- 成田龍一「「サークル運動」の時代—一九五〇年代・「日本」の文化の場所—」河西英通・浪川健治・M. ウィリアム・スティール編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ 多文化の歴史学と地域史』岩田書院、2005年
- 藤木秀朗『映画観客とは何者か—メディアと社会主体の近現代史』名古屋大学出版会、2019年